

二席 沖縄県文化振興会 理事長賞

守礼之邦奇譚^{しゅれいのくにきたん}

仲眞 良邦

序章

「イタさん、そんなことで暮らし向きが成り立つのかい」

先ほどから、かすかな香の匂いが鼻腔をくすぐるほどの暗い席で、
古酒^{クース}のグラスを手に店主へ尋ねた。

私にはどうしたって、この店のありように気を揉まずにはいられなかつ

た。

店先に暖簾が掲げられるのは月の内、十指で足りる。しかも店に集う客はそう多いものではない。いや、いつだって決まりきった顔が揃う。新参加者が飲食店ビジネスに疑問を投げるのは煩冗だと充分に認識をしている。しかし、私には問わずにいられなかった。ところが私が首を傾げたことに店主は、火之神ヒノカンに向かい併せていた手を自由にすると、身に纏う紺の作務衣をびしやり正した。

「これまで喰うに困ったことなどないね。もしも口が侘しくなれば、暖簾をたたみハルサー（畑仕事）をやるわい」

と、にべもない。

つまり店主が胸を張る裏に、趣味ごとで赤提灯に灯りを入れる。という心情が私には透けて見え、

「そのような人生は、なかなか世間に支持されないものだよね」

と、相槌を求めた。それは店主が口にするはしくれに、なにかしら私の人生観と相通ずるものが感じ取れたからでもある。

沢を流れる清流のように、おだやかに生きたい。

ごつごつとした石を丸くし、そこに棲息する生命にはつねにやさしく。大粒の雨に叩かれても決して急流に変わることなく、いつか川の流れに沿い四海へと乗り出してゆく。

私がおもい描く生きかたを、店主は実践している。そして、何よりもこの店には、私を夢中にする真物がいるのだ。

東京で必死に培ってきた仕事のスキルが故郷ではまったく活かされないことに落胆をし、喧噪から逃れる場で息づくことを選択した私に、未枯れた居酒屋は実におもしろい身の置き所であった。

ありていに表現をするならば。惚れた悪女のおもざしに我慢がならず、札入れだけをもどかしく懐に放り込み、いそいそと色町へ出かける男の猥雑さが身に沁みてくるといふものである。

だから今宵も、間口半間ほどの戸口に暖簾が掲げられるものなのか。胸をざわつかせ、冥く入り組んだ小路^{スーヅ}へ分け入り、根太いガジュマルの梢を払うのだった。

1

私は十八の歳にオキナワを離れた。

それから、産声を上げた赤児が成人を迎えるまでのときを跨ぎ、生まれ育った町へ単身戻ったのだ。そのあいだに起こった瑣末をくどくど口

にしようなどとはおもわれない。過ぎたことを懐かしく、晴れがましく。あるいは悔しくおもい描いたとしても腹が膨れるわけではないのだから。半年ほど実家でぐだぐだしていたが、女房、子どものことをほったらかしにする放蕩息子に老夫婦が剣呑な視線を向けてきた。憤慨するのも道理で、私は離婚に至った事実を容易に口にできなかつた。もちろん、もと家族のことは一日たりとも忘れたことはない。だが、どんなに心配をしても根本となる原因が解消されるわけではないのだ。私はあまりの居心地の悪さにたまらず、「ここらが潮時か」とリュックひとつで玄関を出た。それが数年前の夏のことである。

その日の朝。私は、まだ陽が顔を見せぬ泡瀬ベイストリートを北へ歩を向けた。堤防の向こうから頬を撫でる風は、おもいのほかやさしく、汗ひとつ滲まない。そして海面では黒々とした海水が寸断無く白い波を

生み出している。海岸通りは寥々としていて、清廉なる空気を孤独なジョガーが切り裂き、車道をヘッドライトがときおり照らすだけだった。

私が向かう先には勝連城跡がある。不思議なことに隣の町に住んでいても、これまでに城を訪れたことがない。そのグスクから湾を挟み対面に構える中城城跡には学校の催しでいく度か訪れたことがあるというのだ。

「敷地内のあぜ道にイノシシの檻がほったらかしになっていたような場所が、オキナワの宝玉になろうとはなあ……」

と、老父が懐かしむ。かつての中城城跡は遊園地の体を成して、遊戯具などもしつらえてあったようだ。そのことで、いまウラシマの私は、中城城跡が世界遺産だと聞かされ、正直なところ驚いた。確かに、ペリーの琉球奥地踏査隊が訪れた歴史あるグスクだと耳にしてはいたのだが。

まさか、城壁に囲まれた荒れ野のような地所が偉大なる冠を拝受するなんて。そして、もうひとつ。私が気にも留めなかった城が、中城城跡と同じく世界遺産の誉を得たグスクとして昇華をしていた。

勝連城跡の城壁が、樹木の絡み合う小高い丘に陰る。その偉容が私の眼前に迫る頃、あたりの闇はほどなく薄まり、畑で農にいそしむ影も鮮明になっていた。

城の頂き、一の郭から見晴らす中城湾は雄大だ。漁から戻る船なのか、あるいは客を乗せた遊漁船なのかはわからぬが、入り江の先で待つ漁港へゆつくり舳先を向けている。そして湾の向こう、明けの空に浮かぶ丘陵に眼をこらすと、中城城の城壁が見え隠れする。

およそ五六十年前、此の場所に立った城主、阿摩和利はどのようなおもいで、攻城戦を胸に描いたのだろう。湾の先に、まごうことなく百

浦添へ絆を持つ将、毛国鼎、護佐丸が居た。

阿摩和利、護佐丸がなぜ争わなければならなかったのか。古琉球の歴史は深くを語らぬ。だが、オキナワの歴史の中で、闘将たちのいくさは深く琉球人の胸に染み入るドラマツルギーとして刻まれているのは明らかだ。雄大なる風趣を眼前にして、久遠のときに浸る私の中に、不意にあるおもいが粒だつてきた。

将たちの熱に触れたい。

聖地であるグスクを居城として、琉球王朝の礎に拘つてきた男たちの鼓動をわが身に引き寄せたい。おそらくそこには、これまで知りえなかった何かが隠されているのではないか。時代が移り変わる中で、忘れ去られていった意味深いものがひそんでいるのではないのか。その予感を胸に、私は隠れ琉球史のハンターとなるべく歩み出したのである。

グスク巡礼。

勝連城跡を背に与勝半島から石川を抜けて、沖縄本島のくびれを西へ歩を進めた。どの歩道も夏草が膝のあたりまで茂り、落ち着いて歩けやしない。いや、この夏空の下、無防備に目的地へ移動する者がいないからこそその荒れ地なのだろう。たまさかすれ違ふ『わ』ナンバーの車両から、興味津々といったふうな眼球が、「暑い中、何してんの」と燃え立つアスファルトを歩く私を嘲笑う。

恩納村の海岸沿いで、私は足を止めて白亜の建物を仰いだ。眼前に構えるリゾートホテルには縁がある。と、言っても過去に宿泊したわけではない。東京で広告の仕事に携わった時代に、ホテルのオープニングプロジェクトに拘ったのだ。ホテル内のこまごまとしたアイテムのグラフィックデザイン。そして地元紙への新聞広告などを手掛けている。そ

のとき、事業主のトップ（アジアの国から帰化した人物）から興味深い話を耳にしていた。

彼のご尊父が、この地に立ったとき、先人の息吹を感じたと言う。

「オマエの仕事はこの地で琉球に貢献することだ」

父は天の声を息子へ告げた。声の主こそが謝名親方、ジャーナリザンである。だからホテルは、その名を冠している。なぜに琉球と距離置く国に生を成した者が、謝名親方の薫陶を受けたのか、この島で生まれた私にはさっぱりだったのだが。

もし精霊が島の、此の地に、ひそむのであれば、言霊を告げるのは出自を選ばぬ。ということなのか。ならば、過去に大きな過ちをやらかし、多くの怨念を背負う者にも、その資格はあるのかもしれない。私はホテルのゲートをくぐり、フロントの周りをうろつきながら、勝手にそんな

ことを考えていた。

それからホテルを出た私は、果てのない夏空を見上げ、ため息を吐いた。それにしても、この灼熱はなんだ。ひととき胸をざわつかせた懐旧を一瞬にして焼け焦がす。たまらず、私は路線バスのひととなった。

グスクを走破しよう、正確には歩破か。との意気込みは、意地悪くされたヤドカリのように、あつというまに殻の中へ身をひそめた。だけれど、このままのペースで歩けば名護の町に入るのは夜中になる。疲弊した身を野宿で労わるといふ発想が私にはない。ただ、空調で快適に維持されたホテルの部屋で待つベッドだけが自らを追い込んだ褒美となっていたのだ。そんなことで、バス停で腰をおろした自分を卑下することはなかった。この適当な寛大さこそが、私の敵でもあるのだが。それでも、名護で一泊したのち私は、宿泊先から徒歩で山北城、今帰仁グスクへ辿り着

いている。

だが、一度ゆるんだ気を引き締めるのは困難だった。護佐丸が築城した座喜味グスクまで、再び路線バスのひとつとなる。

足を踏みしめ、バスに揺られ、安宿を求め、私は中城城跡、斎場御嶽、首里城跡を『歩バス破』した。そして行き着いたのが、かつての浮島、那覇の辻だったのだ。

2

那覇の中心から、ひと息つく海岸通りの近くに、その小料理屋はひそんでいた。

古い住宅が密になり、アスファルトがめくれ上がる窮屈な路地にあっ

て、店は界わいの耳目を避ける構えを見せていた。店の傍らでは、ガジュマルの樹が澄みきった星空を覆い隠すように、ぐい、と勢い強く枝葉を伸ばしている。それは実にみごとな姿容で、神木とたどってもよい威厳を醸し出していた。頑丈な根はアスファルトを突き破り、その裂け目を絡めとる。そして太い幹から伸びる枝葉は濃く茂り、通りをゆく視線から店の存在をおぼろにしていた。ときおり樹陰から姿を露わにするベニヤ張りの扉は雨風に晒され、表面のところどころがささくれ立つ。たまさか風の悪戯で梢が払われ、通りをゆく者が貧相な店の扉に気づいたとしても、おそらく廃屋だと興味を失うのだろう。それも道理で、壁一面にツタが這うみすばらしい建物の基端部に居座る店は、その異様を支えるには辛そうだ。何かの弾みで店の柱が損傷し、建物が瓦解しても決して不思議ではない趣を備えていた。

私が店の敷居を跨ぐ頻度は、そう多いものではない。

と、言うのも扉は閉ざされたままで客を拒絶することがほとんどだからだ。ところが無愛想な仕打ちを受けても、なぜなのか座り心地の悪い椅子に恋々とする気持ちが生じてくなくなってゆく。できることなら、毎夜、一日の締めくくりをこの場で過ごしたい。そういうおもいだ。それにしても不思議なのは、店先に暖簾が掲げられないさまを、なぜ事前に把握できないのか、ということであろう。そこには意味深いワケがある。ひとつに、店に通信機能が備わらない具合の悪さがある。けれどもそのことは、店主の意固地というより、電話の存在をまったく恩恵として捉えていない事実が存在するためだ。しかも、店でくつろぐ客のほとんどが店主に倣うように、すべての先進技術、時代と握手をするための情報にそっぽを向くのである。いま世界で、狭いオキナワで、何が起こっている

るのか。此の場所に集う客はとことん興味を示さない。

たとえば、市井の者が肩を寄せる酒どころなどでは、その日に起きたニュースが肴になることがある。琉球キングスが勝ったとか、タレントが事件を起こしたとか、あるいは県道の裏にあったそば屋が姿を隠したとか。そんなことを。私にとつてもとくに興味のある話題ではないが。

それにしても此の店に寄り添う客の会話といったものは異質で、世情に興味のアンテナをまったく向けない。その者らに初めて同席した印象は、まるで引き籠り集団のオフ会にさえおもえた。そのありようは、

／時代が足踏みしたまま、だ。／

だから客に酒食を提供する店主も、彼らを心から歓待するようすがない。くるならこい。興がのらねば他所へ行け。店主もまた、気分次第で店先へ暖簾を掲げるのである。そのような事情を知らず、店の存在に興

を抱いた私はその後、いく度か足を運ぶのだったが。訪れるたび暖簾が
かからぬ戸口を見つめ、店主の体調がおもわしくないのか。あるいは、
家庭になんらかの問題を抱えているものなのか。などと、さまざまに逡
巡をしたものだ。

ところが本拠はそのように入り組んだものではなく、たんに店主の気
まぐれが原因と知り、あんぐりとした。つまり店主は、いささかも商い
に熱心ではなかったのだ。それでも私は店主が憎めないでいる。そのそ
もそもが、カウンターを挟み、ひたいのつくりが印象深い店主と対峙し
たときのこと。

「おヌシ、名をなんと申す」

一見の客である私に向けられた主からのひと言が、あまりにもおかし
かった。

注文を聞くでもなく、いきなり核心に迫るせつかちさは、店主のこれまでの生きかたが滋養になっていよう、ちよつと愉快な心持ちになったのだ。これに、「私は泡瀬の生まれで、玉那タマナハ覇ハ巽タツミといいます」そう丁寧に応じている。ところが、店主の流儀なのは知らぬが、笑いも媚もない顔さまで、

「タツツーどの、今宵は豆腐料理のほか用意できぬあんばいだが、それでも構わぬか」

と、大仰に返してきたのである。

酒が底をついたので出せぬ。そう言われればおもいあぐねもするが。初見の相手をタツツー呼ばわりする凶太さで、今宵の料理はひと品限り。冷ややかに断言されて、此処は頑固オヤジの店なのか、と正直うんざりした。だが私は幸いにも偏屈な輩にいやというほど鍛え上げられてきた

ので、耐え、偲ぶ。という教えが身に沁みていたのだ。

「酒さえ出してくれるのであれば……」

厨房の真ん中に構える酒瓶が整列した剥き出しの棚を見回した。

一の郭、御内原、百十、火之神……酒屋では見られない銘柄が並ぶ。

百十はかつての百浦添、姫君のことか。

「モモトを常温で」

と、私。

「ふん、そのような酒が好みなのか」

と、店主。

何か好奇心を揶揄された気がした。ならば、そんな酒を揃えるな。と口から出そうになったが、店主が慎重な構えで大ぶりの湯飲み茶わんへ酒を注ぎだしたことに、なんだか荘厳なる気配を感じ、背をきちんと正

した。

清廉な液体を口に含む。ほんのり甘い。ところが、のどに流しこんだ後、すぐに咽喉を焦がす熱を感じる。これはかなりの曲者だ。

二度、三度、なみなみと注がれた酒でほてる頬を、おさまりの悪い戸口からの夜風がひんやりと撫でてくる。店の軒先で風に遊ばれる色あせた橙色の暖簾には、『レキオス屋』と染め抜かれていた。

レキオスとはポルトガル語で琉球の民のことを言う。かつて古琉球のつわものどもは、握りこぶしほどの島から粗末な船を操り、勇猛果敢に四海へと乗り出していた。そして、さまざまな国ぐにと交易を交わした逸^{ひゃ}りを、遙か西洋まで鳴り響かせていたのである。

だが、二十一世紀の時代にあって小料理屋に冠する店名としては、いささか古風ではないのか。そのことは、酔いの頭を揺るがすわずかなさ

さくれではあったのだが。暖簾をくぐるうちに、此処はそこかしこにある酒の場とは趣がまったく異なる。というおもいがふつふつと沸き上がってきた。懐疑のそもそものは、店を訪れる客がみな特別だった。ということだ。

いや、特別すぎた。

——客は、みな、此の世の者ではないのである。

と、言うのは、初めて店に腰をおろし、あれこれ店主のようすを窺いながら、ゆっくりと酒を胃の深くに染み入れた頃だった。カウンター越しに客と交わされる話題に理解が及ばないことに気づく。店主がちんぷんかんぷんな酔客のたわごとにつき合っている。当初、私はそのように聞き流していた。あるいは客がみなひょうきんで、初見の私を欺くための引つ掛けを目論んでいるのか、とさえ勘ぐった。ところが、よくよく

耳の構えを真剣にすると、店主と客の実態がきわめて浮世離れした存在として立ち上がってきたのだ。

五百六十年前から転がっていたバナナ（その時代にバナナが存在したかは知らぬが）の皮で滑る――。

タイムスリップ。

たとえば、店主が首里王府で多彩な役割を演じた賢才としても名高い役職にあつた。という奇妙奇天烈な過去がなんのてらいもなく酒の肴になる。そのとき、私の躰の頂点で構える参謀本部の中身は、まだ酒に支配されているわけではなかった。酔つてなどいない。新兵の私は、店にかまびすしい古参兵が威嚇する銃剣先をぎっと見据える姿勢をとった、その一弾指。いきなり身の奥が打ち震え、そのさざ波に両の足が絡め取られた。

時代がこんがらがり、やがて無双になる。

その現実に向き合わされ、一本の筋道を紡ぐ努力を強いられる小料理屋、それがグスク巡礼を経ての終着点、レキオス屋の正体であった。

だが、私は、身に降りかかったことを厄災だとはおもわない。これはある意味で僥倖ではないのか。

グスク巡礼では、さまざまな経験をしている。グスクは、かつて神に祈りを捧げる場所であったらしい。その聖域のひとつひとつにおもいを馳せ、遙かな時代を肌で感じている瞬間。闇に埋もれる琉球史の真実が、苔むした岩をひっくり返したときにわらわらと姿を現わす生き物のように、私の足もとから背を這い上がり、耳朶から、眼球の隙間から、あるいは鼻腔の細胞から、そして口腔から、意識の中へなだれ込んできたのだった。

ところが、うかつにも私の中にひそんでいた理性がそのことを記憶のフチに追いやっている。いや、そう考えるのは安易なのかもしれない。おそらくは、私の精神を律するチカラが作用して、パンドラの箱とも言えるような場所へ封印した。そして、今宵……

強固な箱を開く鍵がレキオス屋に転がることを知り、自らそこへ手を伸ばしたのだ。

3

イタさんこと、板良敷が店を構える辻の町は、かつて歴史の厚い遊所町であった。

そしていまなお、首里王府の残り香を色濃く残す地所でもある。

往時の那覇は浮島だったと耳にする。首里の城下とは川に架かるいくつかの石橋で紐帯される関係にあった。

私は辻町の住人として末席に座を求めている。グスク巡礼の結実点とも言える界わいに垣間見る色合いが、ことのほか気に行った。いや、艶っぽいほうではなく、辻町が琉球史の可憐さ、賑やかさを万華鏡に封じ込めたようで、そのさまに惚れ込んだのだ。

建築の世界に『土地の記憶』という概念がある。

それは建造物を支える地盤の深奥に、どのような歴史が積み重なるものなのか。土壌の深くに隠された記憶を探りあてること、なお一層、所柄への敬意が深まる。そのことを鑑みれば、辻町に塗り込められた土地の記憶といったものは、ひどく渾然としたものではあるが。そこから興を引く残り火を掻き灯して、忘却のときを照らす。そうして浮かび上

がってきた存在が、私の宝玉となるのだ。

たとえば、百六十余年前の通りにおもいを馳せれば。江戸幕府最大の脅威となった男たちが闊歩した記憶が、辻の界わいに散りばめられ、しきりに心がざわめく。マーシュ・カルブレイス・ペリー提督一行の喧騒がそうだ。

しかし、黒船の記憶ばかりではなく、首里王府が建立した支那人の宿泊施設である天使館。航海の安全を祈願した天妃宮テンピグウ、そして薩摩藩の在藩奉行所跡も、この地を織りなす歴史に荘厳なる厚みを塗り重ねている。時代のざわつきを秘めた辻のヘソ。と、位置づけられる場所に生活を根差すことで、私に大いなる僥倖と至福が舞い降りる。

その瞬間、ひとの途から脱落した私は、疲弊した眼球を閉じ、久遠から届く足音フントに耳を傾けるのである。

店の主、板良敷が語る土地の記憶もまた、たいへんに興味深い。

レキオス屋が建つ土壌には／祈り／の記憶が沁みている、と真剣な顔ざまをつくるのだ。遙かに置き忘れたままの時代を手繰り寄せれば、この地所は／御嶽^{ウタキ}／であったと板良敷は言う。ウタキとは、／神女^{カミンチュ}がさまざまな神とネットワークをする場。／と、私は理解をしている。そのことについては、琉球の歴史にかまびすしい友人から、やいのやいの突き上げられ、あろうことか終いには放言だと揶揄される始末である。

それでも市井の私が尊大なる注進に抗うことはない。だから、正当な御託にはただ深くこうべを垂れ、「おっしゃるとおりで」と納得を示したあと、こう議論の銚をおさめている。

「琉球史は失われた時代への憧憬だろう。史書、中山世鑑にしる十七世紀半ばに編纂されたものじゃないか。その真贋には心もとない記述も存在

するし。だから、古琉球史の理解は自由であつてもよいとおもう」と。

ところが、中学の社会科教師であり、かつて自費出版で琉球史エッセイを上梓している友人。新城美由紀シンジ ヨウミユキは、口から猛火を噴き上げ嘉手納の広大なベースを焼き尽くさんばかりに怒り、震撼した。

「ええい、大馬鹿者！ オマエのような輩が安穩と生きているから、サンゴは死に絶え、ジュゴンは姿を見せず、ヤンバルクイナは轢死するのだ」と、めちゃくちゃな暴言を浴びせてきた。それから、こほん。空ゼキをぶって、上目遣いに睨んできたのである。

「あれこれ必死だけどき。ホントは艶やかなお姉さまたちを目の保養にしようって魂胆で、辻に居を構えたんじゃないの」と悪たれを衝いてくるのだ。しかも、「頼むから、もと学友たちのラインを色事で賑わすつまらないことだけはすんなよ」と揶揄してくる。

美由紀は年に数度、私用だか、なんらかの会合だとかでコザから那覇へ出てくる。彼女と偶然に再会したのは、沖映通りの書店だ。そのときは互いの老けっぷりに腹を抱えた。高校の頃からのつき合いだから関係は古い。彼女もいつとき東京の大学に在していたので、中央線駅に構える地下の店で、朝まで酒を酌み交わす仲だったのだ。いつだったか、東町で飲んだ勢いで美由紀とレキオス屋へ流れたことがある。けれど、無情にも暖簾は掲げられていない。店で彼女がどのような反応を示すのか、確かめたいおもいだったのだが。閉ざされた扉が、店のことは他言するな。と恫喝しているようで、私はレキオス屋での話は一切、内に秘めるべきだと深く決意したのだ。

「色事で迷惑かけるなよ。年なんだから……」

美由紀の戯言に、いちいち私が応ずることはないのだけれども。かつて、

この地に黒船を率いてきたペリーや、護国寺に居住した英国の宣教師ベツテルハイム、そして古琉球の役どころを担う歴史人へ馳せるおもいといったものは、案外、中学教師の思惑に近く、胸がどきどきと波を打つものなのかもしれない。それでも嘲笑を怖れず、心中を吐露すれば。

——歴史の深みに隠れた偉人の情けを探りあて、それを胸にひしっと抱きしめる。その熱きおもいが、私の残された人生を支えているのであった。

とか、かようにきつぱりいい切られると、いささか面映ゆい感じを受けるだろうが。それでも美由紀に整然と説きたいのは、辻の町は琉球の歴史を築いた者らの生きざまがこすりつけられた地所で間違いはない。という揺るぎない事実である。

ところがいまだ戸籍を汚したことがない、とのたまう美由紀は、

「歴史に恋したって、なんの見返りもないじゃん」

と、立場を忘却し無慮に言い返すのだ。

4

丁寧に磨き上げられた年季が染み入る無垢材の卓に、紅い漆器の椀が乗る。

中心に、ゆし豆腐がふんわり、盛られる。

眼にもあざやかな椀の紅と、どこまでも清廉な豆腐の純白が織りなす妙は実に垂涎。そのさまはまた、椀の中で店主のおもいを宿す紅い焰に、白雪の持つ柔婉たる魂が降り積もる世界を垣間見るようだ。ありていに

言えば、料理人の捏ねた創意工夫が、食に立ち向かう熱をたおやかにやわらげる。かような関係として私には受け止められた。——合掌。

「あいよ」

板良敷が石垣産の七味とうがらしを椀の傍らに寄せる。

ゆし豆腐は、塩より七味で味わうのをよしとする。私のこだわりを店主がおろそかにしないことが、此の店を好む理由のひとつでもあった。

常温の古酒を舌に絡ませながら、その香をゆし豆腐のまろやかさで包み、咽喉深くへ流し込む。馥郁。余計なものはない。七味だけで十分である。ときに店主が、手の込んだひと品を卓に上げることがあるが、主だって簡素な素材がほとんどだ。

いつだったか、「豆腐料理を」と所望した私の卓に、どんぶりに盛った島豆腐と、蒸した甘藷のふた品だけが置かれたときには、料理人の腕を

勘ぐったものだが。すぐにうがった見識であることをおもい知らされた。聞けば豆腐の素材は自らの足で求め歩くという。朝早くに湧き水で仕込んだ豆腐の凜とした涼やかさに、ふつくらと炊きあげられた甘藷の甘みが織り合い、味覚の蕾を開き見せてくれた。と、口にするのはいささか大仰ではあるが。とにかく鮮烈で舌が魅惑に潤う、のひと言。

それでも板良敷の料理には首を傾げることがあった。瑣末なことではあるけれど、素材を薩摩芋とは決して言わない。

あくまで甘藷である。

此のことは、食への拘泥などと言うのではなく、深い因縁によるものだ。そう常連客が、私の耳もとにそつとささやいてきた。

なるほど。

薩摩のふた文字はうっかり口に出せないという禁忌が板良敷朝忠イタラシキチヨウチユウの店、

レキオス屋にある。そのくせ店主には、薩摩の擁護をたつぷりと拝受した過去があったのではないか。かようにまわりから辛辣に投げられる場面があった。それに板良敷は、「若敵の過ちだ」と他所事として打ち返し、取りつく島を与えなかった。

古酒が充分に胃をぬくめたところで、「そろそろいとまするか」私が呟いたとき、暖簾を掻き分ける白い指が視座に切れ込んできた。

「邪魔立ていたしまする」

サンシンによく調和する優美なこわいろが、くたびれた暖簾の間から奏でられる。

「らっさる」

鍋に向かう板良敷が、背で受けた気配に向け低く応じる。今宵、数人目の客は、此の場に似つかわしいとはいえぬ立ち姿を披露していた。

「これは、タツツードの。お久しゅうございます。あいかわらず、ご健啖ではござりませぬか。ときには、わらわの店でもお姿を拝謁したいもので……」

琉球王朝、六代目世の主。シヨウタイキョウ尚泰久が娘、モトフミアガリ百十踏揚である。

あざやかな紅型ワンピースの裾をたたみ、おごそかにスツールへ座する。たちまち傍らから立ち放たれる芳香が鼻腔をうっとり揺さぶってきた。

バツイチの妖艶な女性が、セリーヌのバックから煙管をとり出し、油の沁みた板張りの狭い空間を紫煙で染める。その所作は緩慢ではあるものの、受け止め方によつては優雅そのものにも見えた。

「これはモモさん、早いお目見得ですね。今晚は休店日でしたか」

私は腕に視座をあてた。まだ那覇の歓楽街、松山のクラブがはける時

間には早い。そこにも真物が集う場が在すると聞く。ところが、いく度も足を運ぶが、そのような店など無い。おもいあぐねて、「モモさんの店は、松山のどのあたりにあるのだろうか？」そう、問うと。「ああ、松山や、松山や。酒の沁み入る、ガー（井戸）の近くにおわす」と、煙幕を張る。甘い誘いを演じてくるも、おそらく本音を言えば、生き人に気軽に暖簾をくぐられては困るのであろう。

「わらわに百十を……」とオーダーした姫君は、紫煙を吐き出した口もとから続けて怨嗟を洩らした。

「此の時間に腰を落ち着けるのは、客の機嫌とりに我慢がならぬ由縁でござりまする。まったく、往昔を誇らしげにする殿方にろくな者はおりませぬ」

酔客に腹を立て、店をほったらかしにした。と姫君は細い眉を剣難に

でも出くわしたようにゆがめた。口さがない性癖ではあるが、遠慮会釈もないというのではない。かつて勝連城主へ降嫁した経験を持つ真物クラブ経営者は、店の中にあつては出自をおさえ一応の配慮を示す。酒がすぎなければ——という条件はあるが。

あいな。と店主が卓を、かたり鳴らす。

椀に飾られたスクガラス豆腐に、百十踏揚の長い睫が爆ぜた。板良敷の手によるスクガラス豆腐は、塩漬けされたアイゴの稚魚に、刻んだシークワサーの皮を散らし、島豆腐の頂きに添えた御ちそうである。

「泡盛にはこれが上等さねえ」

まるでプリンアラモードを掬うように、スプーンで口もとへ寄せる。姫君のさくらの彩に染まった両の肉厚が、ふるんと震える。婀娜なしつらえに、たちまち私の口腔は愉悦でしとり、のどがごろり音ネを響かせる。

酒席を辞去せねばという心持ちは、もはやその尻尾さえも消え失せていた。「私にも同じものを」と店主に告げていたのである。

「波の上の浜に盆になると姿を見せるといふ輩をご存じであろうか」

グラスの酒をクイッと空け、踏揚が誰にともなく問う。

「俺にはあの場所がどうにも厄介でね。ここ百年は足を踏み入れたことなどない」

カウンターの奥に備えたパイプ椅子で紙巻きタバコを燻らしながら、店主がうそぶく。私が入店したときのあいさつは、確か、

「海岸にはヤマト娘が肌を露わに群れておった。タツツードのも足を運べば百年、目の保養になる」

と頬をわずかに紅潮させたものだ。世情には疎い、という理解もこと女の話となると違うようだ。そのとき、どうも私が店主をいたぶるよう

な視線をつくつたらしい。

私の顔をまじまじと見ていた店主が、鼻から勢い強く煙を吹き出したあとで、激しくむせた。嘘のへ々な性癖である。だから、ころり島津に騙されるのだ。

江戸幕府の勢いが翳りを見せたとはいえ、薩摩は増長すぎた。

外国から艦船を輸入する任を板良敷へ命じたのである。そのことで板良敷は、投獄の屈辱を受けている。薩摩のはからいで自由を得るものの、結局は琉球に留まれぬ結果となった。そのことで、口さがない常連客は、ヒチヨウヌシンドリときの日帳主取（外交窓口）を「前科者が」と酒の肴に貶めている。

「ああ、知ってるよ。毎夏、満月になると現れる背の高い影だろう」

いつも末席で泡盛をちびり、ちびりやる髪の毛の赤い若い男が言う。

「あれま、アカインコどの。いつからそこへ」

「いつからそこへ。って、タツツーが暖簾をくぐる前からだ」

ぶつきらぼうに口にするのは、赤犬子と名乗った吟遊詩人だ。ただ、この男からは姫君を毛嫌いするようすが感じられた。直接、怨嗟などを言葉に乗せることはないが、ときおり姫君に聞こえぬように、ちつ。と舌打ちをすることがあるのだ。

私は豆腐の上に乗るスクガラスを摘まんだ箸を留めた。

「それは、みなさんと同じような世界に住むものですか」

「遠まわしに言わなくともようござんす。生きた世をいつまでたっても引きずる哀れ者、と直截に申しても構いませぬ」

浮世が長いのだろう。姫君の気位はときにぎつくばらんになる。

「それは、モモトのことだろう」

赤犬子が厨房の隅を睨んだまま吐き出した。その声が意外に野太かつ

たので、私は緊張した。だが姫君は、店主に向かいほほ笑んだ。

「板良敷どのと縁深き御仁じゃ」

「はて、俺の地縁に月の明るい時期だけ這い出てくる獣はおらんが……」

板良敷がきつぱりと否定した。

「ほう。異人はみな獣。これはまた今宵の板良敷どのは辛辣じゃ」

姫君が口角を吊り上げる。

「へえ、あれは異国の地から琉球へ流れてきた者なのか」

赤犬子が杯を口もとに寄せた後、なんともいやらしい眼球を板良敷に向けた。

「異国と言えば、イタさんはペリー閣下とも親交があったようだね」と私は酒を一杯ねだる。ペリーが那覇に錨を下したとき、彼と首里王府の間に立ったのが板良敷朝忠だ。

「昔のことは記憶にない」

店主はぶつきらぼうに、腕に酒を注ぐと、くわえタバコを灰皿の上でもみ消した。

「で、姫君はその異国人が気になると……」

店の空気が険悪の途へ分け入る気配を引き戻すため、私はあえて百十踏揚へ尋ねた。

「此のような場に姿を落ち着かせるのであれば毒はない。しかし、下々の者が群れるような浜に悠然と構えられるのは、わらわに許せるものではない」妙な噂が立つては迷惑だ、とばかりに姫君は吐きすてた。

「なるほど。そりゃ、おおごとだ。おい、アカ。そこの粗塩をひと握り浜にまいてこい」

「いやだ。だって、オイラと関係のないことじゃん」

「じゃん。つてオマエ。浮き世にどっぷり浸かるのも大概にしるよ」

「確かに。辻のおなご衆に悪さをしているらしいではないか。耳触りこのうえない」

姫君が、びしっ。と煙管を灰皿の角に打つ。

「なんだよ、それ。悪質なイジメじゃないか。気分が悪い、帰る」

赤犬子は相当に憤慨したのか、傍らにあったサンシンらしきものを肩に、席を蹴った。

「おい。浜を通るなら、塩を持って行け」

板良敷の声が届いていないのか、赤犬子は姫君の背を陰阻な眼球で睨み店から退場した。

「あれは、五百年も前からいるのであろう。まだまだ子どもじゃな」

ほほ、と笑みを漏らす姫君と赤犬子の只ならぬ関係を私は知る。店主

はどうか。

板良敷は腕を組み上げ、何やら思慮深いたたずまいを見せている。

5

レキオス屋の喧騒から逃れた私は、護国寺の前のきざはしを上り、正殿へ向かう参道を右へ切れ込んだ。

あずま屋を折れ、ただっぴろい校庭のような更地を横切る。すると、モンパノキの葉を掻き分けて、潮騒が耳朶を打ってくる。

波の上ビーチである。

狭小な人工ビーチではあるが、シーズンには観光客が引きも切らさない。今宵は盆の入りということもあるのか、夜も深いからなのか。周り

は珍しく寥寥としていた。

雲が流れ、見事な月輪が頭上に現われた。その月華が照らす砂浜でサ
ンシンを引く影。

赤犬子。

私は静かに砂を踏みしめて、吟遊詩人の傍らに腰をおろした。

「タツツーは泡瀬の生まれだそうだな」

眼前で白い華を咲かせては散らす波を睨みながら赤毛の男が言った。

「十八の頃まで、のほほんと暮らしていた」

「そうか。オイラが津堅島を抜け出したのは、その歳より遥かに若い」

「えっ。アカは津堅島の生まれか？」

「そうだ。ニンジンの喰い過ぎで髪が赤く染まった」

津堅島は泡瀬海岸から石を投げれば届こうかという海面ウナモに浮かぶ。そ

して、人参の産地でもある。髪が赤いのはカロテノイドのせいだと、自嘲したことに私は笑った。

「津堅島と言えば勝連グスク、一の郭からも見えたな」

「ああ、ほんとに美しい島だ」

一弾指、サンシンの弦が侘しい音を奏でた。

「一の郭で阿摩和利加那と会った」

「なに、カナと」

阿摩和利は勝連の民に慕われた。と、ある学者が口にしてから評価が別れた古琉球の武将である。宿敵、中城城主である護佐丸との乱は、二十一世紀のいまも組踊に残る、琉球人のほとんどが知る事件だ。

「そうか、カナはずっと勝連にいるのか……」

月明かりに浮き出た顔はなんともよい表情を醸し出した。

「阿摩和利加那とは読谷間切りユンタンザで出会ったそうだね」

「いかにも。護佐丸が城、座喜味グスクだ。カナは支那の僧と共に琉球を
行脚していた」

「私も彼から耳にした。阿摩和利加那が幼い頃に、弟が首里へ向かう一行
に切り捨てられた。そのとき悲嘆し、震える躰を支えた支那の僧と懇意
になったと」

「むごたらしい話だろう。年端もいかない者の粗相に、馬上の武将は問答
無用で刀を振り下ろした」

護佐丸の一行は世の主、尚巴志の訃報を受け、北山グスクで監守を拝
命していた者と座喜味グスクで落ち合い、首里へ向かう途中だった。北
谷で一行の前に飛び出した幼子を護佐丸が一刀両断にした。一刻も早く
百浦添へと急ぐ中での不幸。亡骸にすがる阿摩和利の背をそつと支那の

僧が撫でた。

「僧は、いく度も琉球と支那を行き来していた。その擁護があり、カナは首里で留守を預かる身となる。そこで僧からさまざまな手ほどきを受けた。カナにとっては不幸なことではあったが、結局のところ災いを転じて福にしたのは、カナになんらかの天命があったからなのだろう」

しみじみと振り返る赤犬子の印象が変わった。赤い髪の男がチャラく私には映ったのだが、なかなかどうして、芯のしつかりした貌をつくる。

「つまり、阿摩和利加那の護佐丸討ちは、亡き弟の仇討でもあった」
歴史が戸惑いを見せた真相が当事者の口から洩れた。

津堅島生まれの男を案内人に、阿摩和利は座喜味グスクから勝連へ向かう。そこで絶対君主として圧政を強いていた茂知附モチツキを討つ。その衝撃は百浦添を震撼させた。勝連城主となった阿摩和利は、たちどころに座

を確固たるものにする。新勢力の按司として勢力を増して行ったのだ。これに百浦添は世の主の娘を降嫁させ、若武者を百浦添の配下に置こうと画策する。その姫君こそが、百十踏揚だ。

王婿となった阿摩和利ではあったが、心中おだやかならざる者がいた。それは降嫁した姫君の祖父、中城の城主におさまっていた護佐丸である。ときを待たず中城と勝連の仲は一触即発の関係に堕ちる。

「カナは護佐丸の首を捕り、弟の仇を討つ。だが、そのことは百浦添への謀反でもあったんだ。護佐丸は世の主、尚泰久の父の代から使えた武将であったからな」

赤犬子は何百年も心の内を辛くした痛楚をこらえるように唇を噛んだ。

「だが、阿摩和利加那はそれも天命だと深く肯いていたが……」

「そうか。カナらしいな……」

指で鼻をこする仕草に、ある予感が掠めた。

「もしやアカは勝連城主に惚れていたのか」

傍らの吟遊詩人の眼球が大きく膨らむ。

「オイラが城主に惚れる？　そうか、タツツーは知っていたんだな。カナの正体」

「百浦添の姫君とのことも、包み隠さず開き見せてくれた」

「あれも、これもか。タツツーのことがよほど気に入ったんだな」

と、赤犬子は私の顔を舐めるように見た。

「そういうことか。月明かりの下、あらためて見定めればイケメンだ。カナ好みだよ」

私が苦笑すると、首をいく度か振り、赤犬子はサンシンを掻き鳴らした。

勝連の阿摩和利

十百歳 踏揚とちよわれ

肝高の鷺

勝連と 似せて

肝高と 似せて

意外にも澄んだ声だった。なるほど、

／女泣かせの吟遊詩人。／

勝連グスクで茂知附を討った盟友を懐かしくおもい出したのか。阿摩和利は頬をゆるめて言ったのだ。

そのとき、月明りが届かぬ堤防のあたりから、手を打ち鳴らす音が静粛を乱した。

「いや、いや。美しい歌ですなあ。琉球に長くいましたが、はじめて耳にするものです」

「オリジナルだからな」

じゃ、オイラは帰る。赤犬子は突然の拍手を耳触りだと男へ背を向けた。「ほう、まるつきり愛想のない男だ。此処は守礼を重んずる邦ではなかったのか」

男は若狭公園へ向かう赤犬子に、「へい、モア、プレイ！」と叫んだ。

「八月の月夜に現れる幽玄な陰。奇妙なウワサの主は、やはりあなたでしたか」

私が勢い口にしたことに、男は蝶ネクタイを正した。

「盆の灯りに誘われたわけではないが、此の時期になるとふつつつと胸が痛むのですよ」

眉根を奇妙に吊り上げる男の顔を、月明かりが浮き彫りにしてきた。

「それは、いまなお琉球にわだかまりがあると……」

「わだかまり？ そんな、なまなかなものではない。知つてのとおり、あたくしは琉球から石持て追われた身だ。琉球をおもい、行動したことが何ひとつ理解してもらえない」

男の受けた侮蔑はよほどひどいことだったのか。メガネのフチが曇る。

「あなたの性格がそうさせたのか私には判断できませんが、とりわけ誤解が多かったようですね」

「誤解？ 違う。いいがかりと訂正いただきたい」

くすりともせずにあまじめに言われたことに、私は頬をゆるめ、ご案内したい場所があります。と男を促した。

波之上宮の裏手から参道のきざしをゆつくり下りた。

「ほお。このあたりもずいぶん変わった」

男は懐旧を噛みしめるふうに、照明でぼんやり浮き立つ辺りを睨み、歩を進めてきた。

「かつての護国寺の面影はもはやありません。那覇の街も、さまがわりしたとおもいます」

「それはそうだろう。あたくしがいた頃から百六十余年のときを重ねているのだから」

「その長いときの中で、あなたに対する琉球の民の評価も大きく変化をしています」

私が指し示したものを男は仰視した。

そこに巨大な石碑が、煌々と膨らむ明りに向かい聳え建つ。

碑にはベッテルハイム博士居住之趾とあざやかに彫り込まれている。

「あなたが来流してから八十年を経て建立されたものです」

おお、とバーナード・ジャン・ベッテルハイムは感嘆の声を洩らした。

「琉球の民はあなたの功績を心から称えています。そのみちしるべを解き明かそうと多くの学者があなたに興味を抱いてもいます。私もそのひとり。あなたが琉球に長く身を留めたほんとうの理由はいつたいなんだったのでしょね……」

振り返った私の眼前にあるのは、深閑とした護国寺の闇だった。

私はかすかに吐息を洩らすと、石碑に添えていた手を自由にした。

6

私は那覇新都心のカフェでコーヒーカップを手にしていた。

前の席では新城美由紀が映画のパンフレットをひろげている。

／十四時から十七時の間は何している？／

リターンをしなければならぬ巧みなメールを受けた。間の悪いことに今日のアルバイトは調休となっている。

「この歳で、まさかアニメとはなあ」

私が苦いおもいをしたのは、決して琥珀色の液体のせいではなかった。

「ほお、オエラクなつたもんだ。確か、学生の頃アルバイトにせいを出したのは、西荻窪のアニメ会社だったよね」

ヤなことをおもい出させる。確かに別れた妻とはそのアニメーション制作会社で出会った。もう、ふた昔も前のことだ。往時のアニメ制作は手作業が主だった。マシンと呼ばれる小さな機械で動画の一枚一枚を透明のセルに転写をするのが私の仕事。そして彩色の担当者がセルの裏側

から絵具を塗って行く。気の遠くなる作業で、創作の場というより、むしろ製作工場との表現に近い趣があった。

だが、現在はデジタルで一括処理をしているらしい。あの頃のスタッフはおそらくいまのシステムには馴染めないだろう。広告制作の世界もそうだった。印刷のもとになる版下は、デザイナーが手作業で制作したものだ。ところが、DTPの台頭であつというまに何十年もかけて磨いてきた技術がクズになった。

一ミリの間に十本の線を引く匠が、昨日、入社した若いデザイナーに職を奪われる。イノベーションとはある意味、残酷なものだ。

そのことをよく知るレキオス屋の真物たちは、だから時代に背を向けているのかもしれない。いかん、いかん。またグチになった。

「で、なぜに社会科教師がアニメなんだよ」

「父兄にいただいたのよ。日頃お世話になりました。って」

「おい、おい。それは贈与じゃないのか。オマエは公務員だろう」

美由紀は手もとメガネ（老眼鏡のことだ）をテーブルに置くと、ソーサーごと手にした紅茶へ口を寄せた。

「法を犯しても観たかったのよ。此の監督の世界感がダイスキだから」

「過去へタイムスリップするという、ありふれた物語がか」

そんなん、ちつとも新しくない。私は少女と少年が入れ代わる何十年も前の映画に胸がときめき、広島尾道まで旅に出た。だが、私が勤める警備会社に在する広島出身の若い男は、その映画のタイトルさえ知らなかったのだ。

長く生きているってことは、古い時代がどんどん躰の深奥に堆積し、占拠するものなのだろう。そんなことで最新の技術が入り込む隙間が無

い。スマホやラインを自由に駆使する若いヤツらを見ると、なおさらそのようなおもいが強くなる。

「で、どうよ。プータロー生活は」

紅茶をサーバーから注ぎたして、美由紀が眼を細める。

「きちんと労働をして、その対価報酬で暮らしているのだが。それが何か？」

「あら、そうなの。すっかり世捨て人になって、隠匿生活に浸っているのかとおもったわ」

言いたい放題だ。だが、うっかり反撃をすると、言葉の暴力で平手打ちに合う。そのとき、背後から、

「これは、お珍しい。タツツードのではござらぬか」

つば広帽に、薄い花柄を散らしたワンピース。それにあざやかな緋色

のカーディガンを併せた女性がサングラスをずらし、私の傍らで唇をすぼめている。

「こちらは」

と、首を傾げる。遮光レンズの奥では瞳が大きく膨むに違いない。

「古くからの友人です」

私は美由紀に聞こえぬように声のトーンを落として応えた。すると、

「新城美由紀です。友人のカテゴリーを逸脱した関係ではないので、あしからず」

私と百十踏揚はおもわず顔を見合わせた。

「オマエ、彼女が見えるのか？」

「ええ、整った鼻梁も鮮明に」

美由紀は踏揚へとびきりのほほ笑みを投げて見せた。するとセリーヌ

のバックから名刺を探りあて、テーブルに乗せた姫君が、

「よろしかったら、今夜にでも。店は十九時から営業しております」

浅く腰を折り、しなやかに踵を返した。

「ずいぶん鼻の高い女ね」

「古琉球世の主、尚泰久王が娘、百十踏揚だ」

「えっ。ただの浮遊霊じゃなかったの？」

おもい出した。

いつか、美由紀が口にしたことを。新城家は太あむしられの系譜を汲む神女（カミンチュ）の家系だ。

なるほど。ゴージャスという言葉は此の空間のために存在したのだな。

私はワインレッドのふんわりとした絨毯を踏みしめて、よく磨かれたカウンターに添えられた革張りの肘掛け椅子に腰をおろした。真物倶楽部は飲食街、松山の奥に陰るビルの地下にあった。彫の深い無垢板の扉に、
／会員制倶楽部 百浦添／と金の銘板がある。

「ようこそ。おふたりでお見えになるのをお待ちしておりました」

琉染の着物だろうか。その方面に疎い私でも質の高さはわかる。御髪を整えた百十踏揚が私の傍らへ身を置いた。

「何をお出しいたしましょう」

私はカウンターの奥でグラスを磨く屈強なバーテンダーの背後を眺め

た。泡盛、日本酒、洋酒のボトルが整然と肩を並べ、棚の気位を押し上げている。

「百十を常温で」

隣の美由紀に眼をやる。その顔さまに緊張はない。それどころか、空の間の中に漂う粉塵さえ見逃さない勢いで瞳を膨らませている。新都心のカフェを出てから、これまでのいきさつを、ざっくり美由紀に告げた。タクシーの中で、美由紀は多くを語らなかつた。おそらくその胸中では、さまざまな思慮が渦を巻いていたのであろう。

「カクテルはいただけなのかしら」

すっかり、余所行きの顔で美由紀がバーテンダーに問う。

「オリジナルのモモト・ルビーはいかがです」

バーテンダーが体軀を裏切らない野太い声で応えた。美由紀が静かに

あごを引く。

「シヨップینگへも出かけるのですか」

百浦添の姫が新都、心で買物をする現実には私は啞然としていたのだ。

「心を涼やかにするだけじゃ。実際の購入は外注しておる」

おもわず、椅子から転げ落ちそうになった。——外注って。

「もしや、神女の血統を継承する者たちへ頼んでいる……」

三口でカクテルを含み終えた美由紀が、身を乗り出すように言った。

「ようもご存じで。わらわのように黄泉の世界にいるものは、下々の者と触れ合うことはできぬのじゃ、タツツードの」

百十踏揚は、きっぱりと口にした後、あやぶむような瞳を私に向けてきた。

「私は大丈夫です。余計なことは口にしない」

「いや、そのことではなく。なぜにタツツードのは、われらと関係を持つことができるのか。そのことを問いたいのじゃ」

ここは嘘が言えない。私はぐっ。と両の拳に力を込めた。

「グスクを巡る道中で、さまざまな者たちの気配がわかるようになったんです」

「ほう。天命が降りたのか。それはまた尊大なことで……」

百十踏揚の睫毛が爆ぜた。

「ノロは世襲制だったようですが、民間のユタを名乗る者にはよくあることです」

美由紀が口にしたことに、姫君は考え込むようすを見せた。その尺がおもったより長く、私は焦れてしまった。

「勝連グスクで阿摩和利加那に会いました」

なに！ と叫んだのはバーテンダーだった。私には此のとき、彼の素性がわかった。

「阿摩和利どのは、どうであった。あいかわらず見め麗しき姿容であったか」

「此の世のものは、到底おもえない美麗さでした」

と、口にして、私は失笑した。此の世のものではないのである。

「さぞや、わらわのことを忌み嫌っておるのであろう」

「いや。姫君にはむしろ感謝をしていたようです」

「さようか。無礼千万ではあったが。いまにおもえばすべては金丸の策略

……」

「金丸？ 尚円王のこと」

美由紀の腰が浮く。

「わらわを勝連へ降嫁させたのも、阿摩和利の尻を叩き護佐丸を討たせたのも、すべては金丸がたくらみじゃ」

ガラスが破裂する音が響く。驚いた。バーテンダーの手の中でジンのボトルが粉々になっている。

「阿摩和利加那も同意見でした。幼子を手にかけたのが護佐丸の手代だと知りながら、いまこそ仇を討て、すべては儂が穩便に済ませる。そう勝連へ文を届けたそうです」

「阿摩和利どのは、ほんに気のどくじゃった……」

「それでも、おふたりは夫婦の契りを交わしたのでしよう」

まるで他人事のように口にする百十踏揚を不審におもったのか、美由紀が小さく洩らす。

「そこには、歴史に残らない、カラクリがあったんだよ」私は美由紀の大

きく膨らむ瞳に視線を移した。

「阿摩和利どのの正体を知っておったのか」

いつのまにか、煙管を手にしていた姫君が細い眉尻を吊り上げた。そのとき、店内にぶ厚い声が響き渡る。

「いや、いや。どうした。珍しく先客がおるではないか」

いつか姫君が口にした、攀安知ハンアンチが数人を引き連れてボックス席を陣取った。山北の按司らを苦しめた、今帰仁グスクの暴君である。そのことで、私と美由紀は店を出ることになる。バーテンダーが血だらけの手を扉のほうへ向けたのだ。

店を後に松山公園へ歩を進めた。小高い丘のベンチへ腰をおろすまで会話はなかった。照明にやたら羽虫が舞うのが鬱陶しい。

「やっと心が落ち着いたわ」静かに肯くと美由紀は私の顔を覗きながら口

にした。「で、阿摩和利の正体って何よ？」

「阿摩和利加那は女だった」

美由紀は絶句した。開いた口の奥歯に治療痕が覗く。

「金丸はそのことを知っていた。だから娘を勝連へ降嫁させる無謀を父の尚泰久も了承したのだろう。その事実を知らなかったのは、祖父、護佐丸だけだったってことだ」

すべてを納得したのか。美由紀はいく度もあごを引いた。刹那、はつ、と顔を上げる。

「あの、バーテンダー。もしや……」

「おそらくそうだろう。勝連から姫君を奪還した武将。大城賢雄こと、ウニウフグシク」

終章

私は落胆していた。

レキオス屋のあった場所は、辻町の御嶽がある鬱蒼とした杜にとつて代わっていた。松山の姫君の店があったビルも廃墟同然だった。何が起こったのだろうか。私が調子に乗り過ぎたということか。

あるいは、百十踏場、板良敷朝忠。どちらかの意思が働いたのか。まさか、すべてが夢だったってことはないだろう。なぜなら、那覇市内の中学へ赴任した美由紀とは一緒の部屋で暮らしている。

「へこたれるなよ。すぐにへこむのは異の悪癖だぞ」

一気に負の世界へ落ち込んだ私に、厳しいムチが飛ぶ。

さあ、行くぞ。と、美由紀はCB400のエンジンに火を入れる。

今宵も私たちは、那覇市内をタンデムでバイク巡回をする。
真物が集う場を探し求めて。

(了)